

窓際の私の席から、透き通るような青空を眺めていると、空の中を突き進むヘリコプターが見えた。誰かの「わあっ、ヘリコプターだ。」の声につられて、友人たちが次々と窓際に集まってきて、笑顔で「すごいね。」「かっこいいね。」と歓喜の声をあげた。集まっている同級生の一人が「あれって、ドクターヘリっていうんだよ。」と言った。小学生の私は、その時初めてドクターヘリの存在を知った。

それ以降、私はドクターヘリの存在を意識することはあまりなかったが、昨年、新型コロナウイルスの感染症が拡大した際「病院のベッドの空きがなくなったら、ヘリコプターで運ばれる。」「重症になったら運ばれる。」そんな言葉を耳にした。「ベッドの空きが無くなる?」「重症化したら五島で治療ができないの?」こんな考えがくるくると頭の中でまわった。父、母、姉、祖父母、友達…大切な人の顔を浮かべると、どうしようと不安になった。

五島には大きな病院は少ししかない。新型コロナウイルスのような感染症が拡大したら、病院はいっぱいになる。ほかにも、心臓や脳の大手術は、五島の設備では難しいことがあるそうだ。

五島の中で治療ができないとなったら、海を越えて本土の病院に運ばなければならない。命を救うためには早く運ばなければならないが、船だと長い時間がかかってしまう。そんなとき、ドクターヘリなら短時間で運ぶことができる。ドクターヘリのおかげで、たくさん人の命が救われている。

ドクターヘリは、全国に五十四機あり、一年で一機あたり二、五億円、一回の出動あたりだと四十六万円のお金がかかるそうだ。

しかし、ドクターヘリを使用したとしても、大きなお金を払う必要はない。その費用は、税金で賄われている。もし、運ばれる人がそのドクターヘリの費用のすべてを支払わなければならないとなったら、命の危険があったとしても、ドクターヘリを使えない人が出てくるだろう。

たくさん人の命がドクターヘリによって救われ、税金によって救われている。この税金は、働いている人の思いやりの集まりだ。私は、将来しっかりと税金を納め、大好きなふるさと、大事な人の命を守る手助けができるようになりたい。

ときどき夜にヘリコプターの音が聞こえる。そのときに思うこと、それは小学生の頃の歓喜の声をあげたときのものとは少し異なる。「ふるさとの命を守る命綱としてのヘリコプター」そう思う。脳梗塞や難産の妊婦さんなど、たくさん人の命が救われている。私はヘリコプターに祈りを込める。